

北インドにおける動物土偶

その変遷と意義

上 杉 彰 紀

1．はじめに

南アジアでは、インダス文明をさかのぼる農耕社会の発展に伴って土偶が製作され、観念世界を表徴する器物として用いられてきた。その伝統は、それぞれの時代で変容を経ながらも現在まで続いている。

土偶には、人物をあらわしたものと動物を表現したものがあり、いずれもがその時々社会・文化の観念世界の中に定位されながら機能してきた。いいかえれば、人々の観念世界や信仰とのかかわりの中に土偶の伝統はその存立基盤を有してきたのである。

その中で、動物土偶は自然に対する信仰が発達した南アジアにおいて独自の伝統を有しており、自然信仰の形象化という社会行為の一端を担わされてきたといっていよい。

上述のように、土偶はそれが現れる時代・地域によって、表現される属性が変化しており、社会・文化によって求められる属性の集合がその脈絡に応じて決定されてきたと考えられる。動物土偶の場合にも、表現される動物の種類や形態、あるいは細部表現が異なっており、時代・地域に応じた特性を認めることができる。

本稿では、南アジアの中でも北インドの歴史時代を対象とし、動物土偶の変遷を把握することを試みる。これまで、人物土偶に関しては、いくつかの研究がなされてきたが、動物土偶に関しては、基本的な変遷の枠組の構築さえもがなされておらず、研究が稀薄である¹⁾。土偶という枠組の中でみれば、人物土偶と動物土偶は観念世界の中で不可分の関係にあると考えられ、それぞれの理解に加えて、両者の相互関係を明らかにすることなしに、土偶が果たした役割を総合的に理解することは困難である。本稿は動物土偶の変遷を把握することによって、人物土偶も含めた今後の南アジア土偶研究の出発点を用意するものである。

なお、本稿で採用する北インドの時期区分は、土器の変遷を検討したうえで画定したものである（第1表）。

2．サハート・マハート遺跡出土の動物土偶

さて、本稿では、先述の目的にしたがって、北インドの動物土偶を検討の対象とするが、まずは筆者自身が整理に関わってきたサハート・マハート両遺跡の出土資料を対象として、時期ごとに分類を行なうことにしよう。サハート遺跡に関してはすでに正式報告書〔網干・園田編1997〕が、マハート遺跡に関しては調査継続中で出土遺物に関しても整理の段階にあるが概報〔網干・高橋編2000〕が刊行されている。両者ですでに公表されている資料をもとに、分類を進めていくことにしたい。



第1図 北インド遺跡分布図

A．概要

サヘート遺跡では、関西大学による調査によって後期NBPW段階終末からポスト・グプタ朝併行段階にいたる文化層序ⁱⁱが、またマヘート遺跡ではBRW・BSW段階からポスト・グプタ朝併行段階にかけての文化層序が確認されている。前者は4期に、後者は6期に時期区分されているが、その併行関係は第1表に示したとおりである。

サヘート・マヘート両遺跡での土偶の最古例はマヘート遺跡 期にあり、その多寡はあっても、各時期を通して土偶の出土が認められる。土偶には人物土偶・動物土偶ともにあり、それぞれに時期的な様式・形式の変遷がみられる。ここで取り上げる動物土偶の初現はマヘート遺跡 期にあるが、その出土数量は少なく、かつ定型化した形式は確認できない。マヘート遺跡 期には、定型化が顕在化するとともに、出土数量が増加する。マヘート遺跡 期に特有の形式はサヘート遺跡では出土がなく、マヘート遺跡 期すなわちサヘート遺跡 期になって動物土偶が出土するようになる。全体的に、この時期の動物土偶は両遺跡ともに出土が少ない。マヘート遺跡 期・サヘート遺跡 期には、動物土偶の出土数量が増大している。マヘート遺跡 期・サヘート遺跡 期には、両遺跡に共通する形式が多く出土している。

サヘート・マヘート両遺跡における、土偶の変遷は数量・形式ともに共通しているのが特徴であり、両者を一つの変遷の枠組の中で論じることを可能にしている。以下、各時期から出土している土偶の分類を行い、その特徴を概観することとしよう。

第1表 北インド編年表（上段の数次は以下のとおり。1 = ガンジス川上流域、2 = ガンジス川中上流域、3 = ガンジス川中流域、4 = ガンジス川中下流域、5 = ヒマラヤ山脈南麓）

| 北インド編年 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | サヘート遺跡 | マヘート遺跡 | |
|--------|------|------------|----------------------|----------------------|----------------|--------|--------|--|
| | VII期 | ポスト・グプタ朝以降 | | | | IV期 | VI期 | |
| 500AD | VI期 | グプタ朝併行段階 | | | | III期 | V期 | |
| | V期 | クシャーン朝併行段階 | | | | II期 | IV期 | |
| AD | IV期 | NBPW後期 | | | | I期 | III期 | |
| | III期 | | | NBPW前期 | | | II期 | |
| 500BC | II期 | PGW後期 | | BRW・BSW後期 (鉄器導入期) | | | I期 | |
| | I期 | PGW前期 | BRW・BSW前期 (金石併用期) | | | | | |
| 1000BC | | | 断絶 | | | | | |
| | | ハラッパー系文化 | OCP | ? | 新石器文化 (BRW) | ? | | |
| 1500BC | | | | | | | | |

B．各時期出土の動物土偶（第2図）

マヘート遺跡 期（北インド 期）

マヘート遺跡 期の段階では、土偶自体の出土量がきわめて限定的である。動物土偶に関しては、水鳥と考えられる1点を確認できるのみである。手足や翼などを表現せず、水面に浮いたように表現されており、刺突によって眼を表現する以外に細部表現は認められない。赤褐色スリッブが施される。マヘート遺跡に限ってみるかぎり、この時期には動物土偶の製作はきわめて限定的な行為であったことが推察できる。

マヘート遺跡 期（北インド 期）

マヘート遺跡 期には土偶の出土量が飛躍的に増大しており、その中で動物土偶もまた多くの出土例が報告されている。この時期にみられる動物土偶の種類はゾウ形が主体で、ウマ形・ヒツジ形がわずかに含まれる（1～5）。動物の種類を超えた様式という点からみると、この時期の動物土偶は一つの様式の範疇に含まれると判断してよい。すなわち、眼を菱形にあらわし、貼付・沈線・刺突・円管文・スタンプ文によって細部表現を行なうという点で、強い斉一性が認められる（以下、これらの属性からなる一群を菱形眼様式・形式と呼称する）。

菱形の眼はあらかじめ菱形の輪郭と眼球をあらわす隆点を彫出したスタンプ原体を押し当てることによって表現されている。スタンプ文は車輪形および木葉形、あるいは隆線と珠文を組み合わせによる文様が主体で、頭頂部のコブから胴部背中側に多数施されている。円管文も同様で、

頭部から胴部にかけて多数施される傾向にある。沈線に関しては、胴部背中側への施文のみで、特に胴部前半側に横方向の沈線を施し、そこから派生するように斜め方向の沈線が施されるものが多い。円管文やV字形の刻目を施すものの中にも、こうした二股状に連続列状施文を行なうものがあり、胴部施文に関する規則性が存在することが判明する。

一例のみが確認されているヒツジ形についてみると、胴部が断面円形のT字形を呈し、中心に直交するように貫通する穿孔が施されている。明らかに横方向の筒部には木棒を通し、その先端に左右1個ずつの土製の車輪を固定したものと考えられる。すなわち、前輪のみの車のごとき形態を呈していたものと復元できる。主軸方向の筒部にもおそらく木棒を通したものと考えられるが、これは後方から挿入した木棒を持って前方に押すことによって、土偶を動かす行為に関連したものと推定できる。後述のように、他の遺跡から出土したヒツジ形土偶の場合でも、本例のように車輪を取り付け、可動にしたものが存在している。

色調についてみると、芯部から表面にいたるまで灰色を呈する個体と、橙色系の色調を呈するものに大別できる。前者は堅く焼き締まっており還元焰焼成、後者は酸化焰焼成によるものであることが明らかである。橙色系を呈するもののうちには、赤褐色のスリップを施したものも存在する。表面調整としては、いずれの色調を呈するものに関しても、ミガキによって平滑に仕上げられている。ただし、橙色系を呈するものの中には、ミガキが省略されたものも含まれている。

法量についてみると、12cm前後から20cm前後となるものが主体となっている。ただし、中には10cm以下の小形のものや20cm以上の大形のものも含まれる。

また、期層からの出土であるが、本来的にはこの時期に帰属すると考えられる資料がある(16)。それは、四肢・胴部・尾に平行沈線文を施文したものであるが、この時期に帰属させる根拠としたのは、この平行沈線文を特徴とする資料が後述するパータリプトラ系形式に所属すると判断できることによる。頭部および四肢を欠損するが、遺存長74cmを測り、明赤橙色のスリップが塗布されている。

マヘート遺跡 期・サヘート遺跡 期(北インド 期)

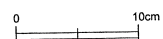
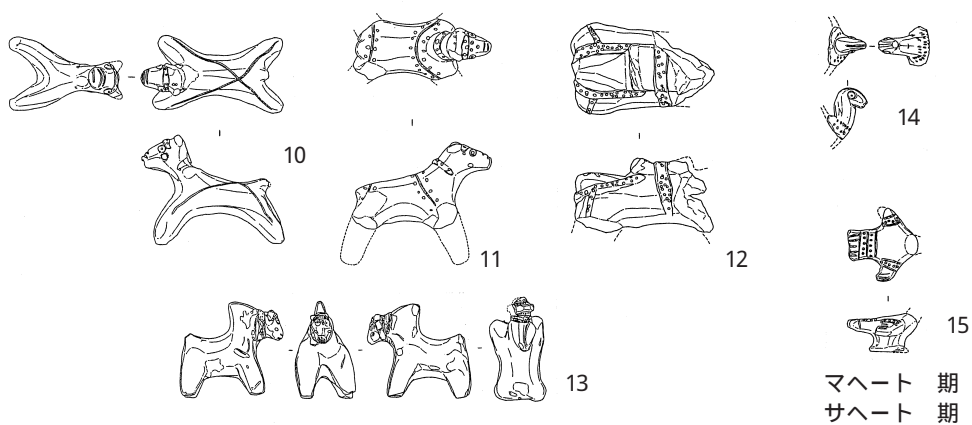
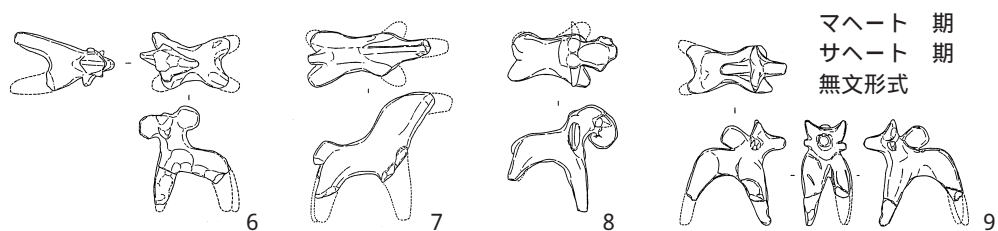
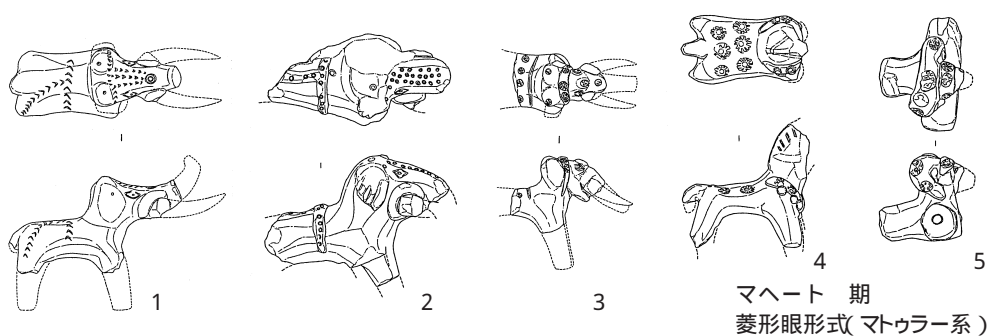
マヘート遺跡 期はサヘート遺跡 期に併行する段階であるが、この時期には動物土偶が極めて限定的である。人物土偶が多く出土しているのとは対照的で、この時期の両遺跡に共通する様相となっている。

この時期に確認できる動物土偶としては、サヘート遺跡で出土しているサル形がある(18・19)。ただし、出土数は2点に限られている。成形は型によって行われており、19は両手を胸の前に合わせて合掌し、座った姿勢をとっている。18は顔がクマのような表現で判然としないが、右手を胸の前に置いている。ほかには、ゾウ形が1点出土しているが、型式学的には前後の時期とのつながりは持たない。

一方、この時期にみられる鳥形(20)は、同時期の人物土偶にみられる断面角形の棒状工具による沈線文によって翼の表現がなされており、層位的・型式学的にこの時期に帰属するものとして判断できる。翼を広げた状態に表現されており、脚台を持つ。

マヘート 期・サヘート遺跡 期(北インド 期)

この時期には、動物土偶が再び増加する傾向にある。この時期に特徴的な動物土偶の一部は前段階にその初現を求めることができる。すなわち、マヘート遺跡 期・サヘート遺跡 期が指定



第2図 サヘート・マヘート遺跡出土 動物土偶実測図 (1:6)

される北インド 期の後半に登場したと考えられる無文系のコブウシ形・ゾウ形・ウマ形が主体をなす（6～9。以下、この無文形式とする^{jii}）。

手成形により、頭部・脚部・コブがつくりだされているが、それ以外の細部表現は一切認められないのが特徴である。表面調整についてみると、ミガキは施されず、平滑性はない。スリップの塗布も認められず、淡橙色から淡褐色を呈するのが特徴である。

法量についてみると、全長7.5～10cm前後で、法量の規格性がみられるのが特徴である。

マヘート 期・サヘート遺跡 期

この時期には、前段階の無文形式とは大きく異なり、文様を含めた多様な細部表現が施されるようになる。動物の種類としては、その特定が難しいものの仮説的な同定によれば、イヌ形・ウマ形・コブウシ形・鳥形が確認できる（10～15）。前段階の無文形式でみられたゾウ形は確認されていない。これらの動物をあらわす土偶は一つの様式的特徴を有しており、すなわち貼付・刺突・刻線による細部表現技法を用いている。

細部表現形態においても斉一性が強い。頭部から概観すると、眼は円形粘土板貼付＋刺突、口は横方向の沈線、鼻は鼻孔を刺突によって表現する。額部分には粘土紐を貼りつけ刺突を連続的に施し、また頸部にも背中側に同様の粘土紐貼付＋刺突を施す。胴部への施文にはいくつかのヴァリエーションが認められるが、前肢あるいは後肢を横方向に貫く沈線あるいは沈線＋連続刺突文が主体的に採用されている。

色調についてみると、橙色系の地に赤褐色のスリップの塗布がきまってみられる。表面調整については、平滑性が強く、ミガキが施されていることが明らかである。焼成は良好で、焼き締まる。

法量についてみてみると、12cm前後のものが主体となっており、稀に20cm以上の大形のものや7cm前後の小形のものがみられる。

この形式については、サヘート遺跡の報告書において、北インド 期（クシャーナ朝期）に帰属する可能性が示されているが、マヘート遺跡での調査成果によると、遺跡編年 期（北インド 期）の遺構に伴って多数出土していることから、ここではこの時期に帰属するものとして判断する。

また、この時期に中心を置くものと判断される資料に両面型成形によるコブウシ形がある（17）。下面に平坦面が設けられ、自立する構造をとっており、全長3.5～5.0cmを測る。コブウシは座した姿勢に表現されている。サヘート遺跡では、遺跡編年 期（北インド 期）を中心とする層位から出土しているが、この時期の層序は攪乱が著しく、実際の帰属年代を特定するのは困難な状態にある。ただし、ソーンク遺跡やナルハーン遺跡での出土例からみると、北インド 期もしくは 期に帰属する可能性が高い。

C. サヘート・マヘート遺跡の動物土偶のまとめ

以上、サヘート・マヘート両遺跡で出土した動物土偶について、時期ごとに概観してきたが、各時期の動物土偶の特性すなわち様式の差異、あるいは時期間の変化と連続性が明らかになる。

マヘート遺跡 期には、きわめて属性の斉一性が強い動物土偶が多く出土しており、定型化が著しい上に型式変遷はみられない。したがって、マヘート遺跡において様式形成が進行したので

はなく、他地域ですでに完成されたものが、マヘート遺跡にもたらされた様子を示唆している。

属性の斉一性という点に関連して、ここで注意を払っておきたいのは、赤色系の色調を呈するものと灰色系の色調を呈するものが存在することである。この点については後章において詳述するが、明らかに酸化焰焼成と還元焰焼成という異なる焼成技術によって焼成されており、焼成技術の点で2つの系統が存在したことを示唆している。

マヘート遺跡 期に著しく動物土偶は発展したものの、マヘート遺跡 期・サヘート遺跡 期には、前段階の土偶様式が消滅するとともに、動物土偶自体が低調となる現象は、前段階の動物土偶の存立を支えていた社会・文化的要因が消失したことを示しているといっていよいであろう。動物土偶に対する必要性あるいは需要が一時的にせよなくなったと考えられる。

この時期の後半には、無文形式が登場するが、マヘート遺跡 期の様式・形式とはまったく異なるものであり、両者は系譜上のつながりを持たない。無文形式の登場は、一旦動物土偶が衰退した段階を経たのちの新たな志向性に基盤を置くものとみなすことができる。この無文形式はマヘート遺跡 期・サヘート遺跡 期にも続いており、比較的長期間の時間幅で安定した様式の確立が達成されたと考えてよいであろう。

マヘート遺跡 期・サヘート遺跡 期には、無文形式から大きく転換し、豊富な細部表現を持つ様式へと変化している。その様相は、漸移的な変化というよりも劇的な変化と表現すべきものであり、両様式間につながりは想定し得ない。まったく異なる系譜の中から新たな様式が形成され、結果としては前段階の旧様式に取って代わった状況を看取することができるであろう。どのような経緯を経て様式転換が生じたのか判然としないが、様式転換を促す要因が背景に存在したのであろう。

以上のサヘート・マヘート両遺跡の出土資料の検討を通していえるのは、各時期の土偶様式間には直接的なつながりはなく、根本的な様式属性の変化が生起しているということである。動物の種類に目を転じて、ゾウ形・ウマ形・ヒツジ形（マヘート遺跡 期）サル形（マヘート遺跡 期・サヘート遺跡 期）コブウシ形・ゾウ形・ウマ形（マヘート遺跡 期・サヘート遺跡 期）イヌ形・ウマ形・コブウシ形（マヘート遺跡 期・サヘート遺跡 期）と、変化が著しい。この現象も様式の大転換と関連させて理解することができるであろう。したがって、様式の大転換現象はサヘート・マヘート遺跡という一つの地域でのみ理解できるものではなく、北インドの他地域との関連性の中で捉えなければならない。次章では、サヘート・マヘート遺跡の資料で把握しえた諸点を念頭において、北インドの他地域の事例について検討していくことにしよう。

3．北インド各地出土の動物土偶

本章では、北インドおよび北西インドの遺跡（第1図）から出土している資料を検討し、北インド全体での動向を把握してみることにしたい。ただし、ここで取り上げる遺跡の中には、十分な報告がなされていないものも含まれているため、概略を把握しうるにとどまる部分が多い。しかしながら、サヘート・マヘート遺跡出土資料との比較によって有効な情報を引き出せる部分も多く、今後の研究の方向性を示す上でも必要な作業と考える。ちなみに、ここで北西インドを取り上げるのは、北インドとの比較を念頭に置いたためであり、北インドの動物土偶がどの程度の

地域的広がり有しているのか明らかにするためである。

ガンジス川上流域

バグワーンプラ遺跡（第3図）

バグワーンプラ遺跡では1975～76年にかけて発掘調査が行われている〔Joshi 1993〕。後期ハラッパー系文化とPGW文化の時期的共存関係が確認された B 期（北インド 期）において動物土偶の出土が報告されている。

B 期から出土した土偶には、ヒツジ形・イヌ形・シカ形・鳥形などが確認されているが、この中でヒツジ形（1）・鳥形（2）には沈線文による施文形態および形態において共通性を示す個体が5点報告されている。ヒツジ形は巻角を持ち、頭部側面に穿孔が施される。体部には、四肢も含めて、平行するヘラ描沈線が施されており、四肢の先端には車輪を固定するための棒を通すものと推定される穿孔が施されている。鳥形も頭部側面に穿孔を持ち、体部に沈線文が施されている。

沈線文を特徴とするヒツジ形はアーラムギールブル遺跡〔IAR 1958-59〕やジャーケラー遺跡〔IAR 1985-86〕のPGW文化層（これらの遺跡では北インド 期に併行）から出土しており、この特徴を持つヒツジ形はPGW文化と関係を持つ可能性が高い。

ローパル遺跡

パンジャブ州にあるローパル遺跡では、1953～54年にかけて発掘調査が行われており、北インド 期に併行する遺跡編年 期に菱形眼形式が出土している〔Sharma 1955〕^v。ローパル遺跡で出土している菱形眼形式はゾウを表現したもので、菱形眼・スタンプ文・貼付による細部表現を特徴とする。灰色系・赤橙色系が含まれる。このほかの時期に関しては、正式報告書がなく、かつ実資料の実見も行っていないため、判然としない。

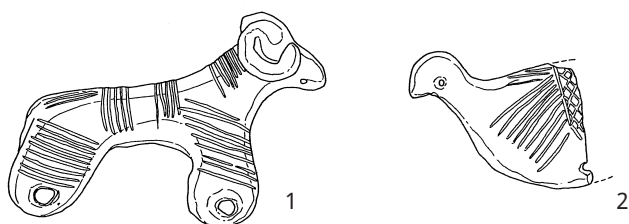
ガンジス川中上流域

アトランジーケラー遺跡

アトランジーケラー遺跡では、1960～66年にかけて発掘調査が行われている〔Gaur 1983〕。動物土偶は遺跡編年 期（北インド ・ 期）および遺跡編年 期（北インド 期）から出土している^v。

遺跡編年 期出土の動物土偶は、2点のみであり、1点はコブウシ、もう1点はブタに推定されている。コブウシ形土偶は頭頂部に2本の角を持ち、眼の表現を有する。鼻の部分には刺突が施されている。また、後頭部には欠損するが、コブの表現がある。ブタ形は欠損著しく、細部表現等は判然としない。報告者である R. C. Gaur によると、これら2点はいずれも 期でも上層からの出土とされており、北インド 期に措定される可能性が高い。

遺跡編年 期から出土している動物土偶は、細部表現からみて、大きく3類に分類することができる。一つは、菱形眼・スタンプ文を特徴とする菱形眼形式である。2つめは円管文による眼の表現を特徴とするもの、3つめはそれ以外の群として把握し得ないさまざまな特徴を持つものである。菱形眼・スタンプ文を特徴とする一群には、コブウシ・ゾウ・ウマ・その他不明動物があり、円管文を特徴とする一群にはコブウシ・一角獣がある。その他のものには、コブウシ・ウマ・サルがみられる。また、鳥形の土偶の出土も報告されているが、形態属性の点からみると、上記3群のいずれにも属さない。



第3図 バグワーンプラ遺跡出土 動物土偶 (ca. 1 : 3)

色調の点からみると、遺跡編年 期から出土した2点はいずれも赤色系のウォッシュが施されており、 期から出土した資料は、菱形眼・スタンプ文を特徴とする一群のうちの2点、定型化しない一群のうち1点が灰色系、ほかは赤色系を呈する。

アトランジーケラー遺跡出土

資料の特徴は、菱形眼形式にみられる動物の種類が多様であること、またその他の特徴を持つ動物土偶が比較的まとまった形で出土していることである。また、菱形眼・スタンプ文を特徴とする一群は、灰色系のゾウ形1点を除いて、成形および細部表現が粗雑である点も注意される。

マトゥラー遺跡

マトゥラー遺跡では、1954年、1973～76年にかけて発掘調査が行われており、遺跡編年 期（北インド 期後半～ 期併行）^{vi}において菱形眼形式の出土が報告されている^{vii}。菱形眼・貼付文・円管文を特徴としている。15～20cm前後のものが出土している。

一方、マトゥラー遺跡では、古くより考古学的な発掘調査によらない盗掘や偶然による遺物の出土が多く、出土層位や出土状況に関する情報が欠落した状態で、インド国内あるいは諸外国の博物館に収蔵されている例が多い〔Bautze 1995; Pal 1986〕。それらは型式学的には、菱形眼形式に属するものである。J. Bautzeによって紹介されたパトナー在住の個人が所蔵する資料とP. Palによって紹介されたロサンゼルス市立美術館所蔵の資料をみると、これらは大形で^{viii}、背中に騎者を乗せている。また、ニューデリー国立博物館に展示される資料も同様に大形で、騎者を乗せている。

マトゥラー遺跡で出土している菱形眼形式は、菱形眼や施文方法・細部表現形態などの諸点で、北インドの他の遺跡で出土している資料に共通しているが、マトゥラー遺跡で出土している資料は大形のものも含めて灰色系の色調を呈するものが主体となっている。また、騎者を乗せる大形の資料もマトゥラーに限られる。ここに、マトゥラー遺跡での出土資料と他の遺跡での資料の差異を見出すことができる。

そこで注目されるのは、菱形眼およびスタンプ文・貼付による細部表現が、マトゥラー周辺に起源する人物土偶と共通するという点である^{ix}。また、灰色系の色調もマトゥラー系の人物土偶に特徴的なものであり、両者の共通性をみることができる。こうした諸点からみると、菱形眼形式は、マトゥラー系人物土偶との関連性が強いことが理解でき、菱形眼形式の起源をマトゥラー系人物土偶との関連性に求めることができる。したがって、菱形眼形式はマトゥラー系動物土偶形式と理解してよいと考える。

ソーンク遺跡（第4図）

ソーンク遺跡では、1966～74年にかけて発掘調査が行われており、動物土偶は遺跡編年 期から 期にいたる層位から出土している〔Hartel 1993〕。

遺跡編年 期（北インド 期）から出土している動物土偶は3点のみであり、かつ細片であ

る。全形が判明するものではなく、動物の種類の特定制も困難となっている。うち1点は角を持つ頭部が遺存しており、菱形眼の表現を有する。スタンプ文の採用はない。続く遺跡編年 期にみられる菱形眼を特徴とするゾウ形にさかのぼる可能性があり、菱形眼の初現資料である可能性がある。

遺跡編年 期（北インド 期前半）からは、菱形眼・貼付・円管文を特徴とするゾウ形・ウマ形（1・2）、鼻先の刺突のみを細部表現とするコブウシ形（3）および不明動物、眼を円管文によって表現するもの、眼を刺突を施した円形粘土板によって表現する鳥形などが出土している。菱形眼を特徴とするゾウ形はいずれも灰色、その他は茶褐色系を呈している。

遺跡編年 期（北インド 期後半）にも、菱形眼を特徴とするゾウ形・ウマ形・ヒツジ形（4・5）、眼・鼻の刺突のみに細部表現を限定するコブウシ形（6）、顔のみを型成形、それ以外の部分を手成形によるサル形（7）、無文の鳥形などが出土している。菱形眼を特徴とするゾウ形・ウマ形と無文に近いコブウシ形・鳥形の組み合わせは、期以来の組成傾向であるといえよう。サル形は他の遺跡に類例が稀なものであり、ソーンク遺跡の動物土偶の特徴をなしている。また、この時期の菱形眼形式は茶褐色系を呈しており、灰色系を呈するものがみられない点も注意すべきである。注意されるのは、両面型成形（合わせ型）によるコブウシ形が出土していることである。完全な型成形によるものであり、期以来の伝統的な成形技法とは明らかに系譜を違えている。

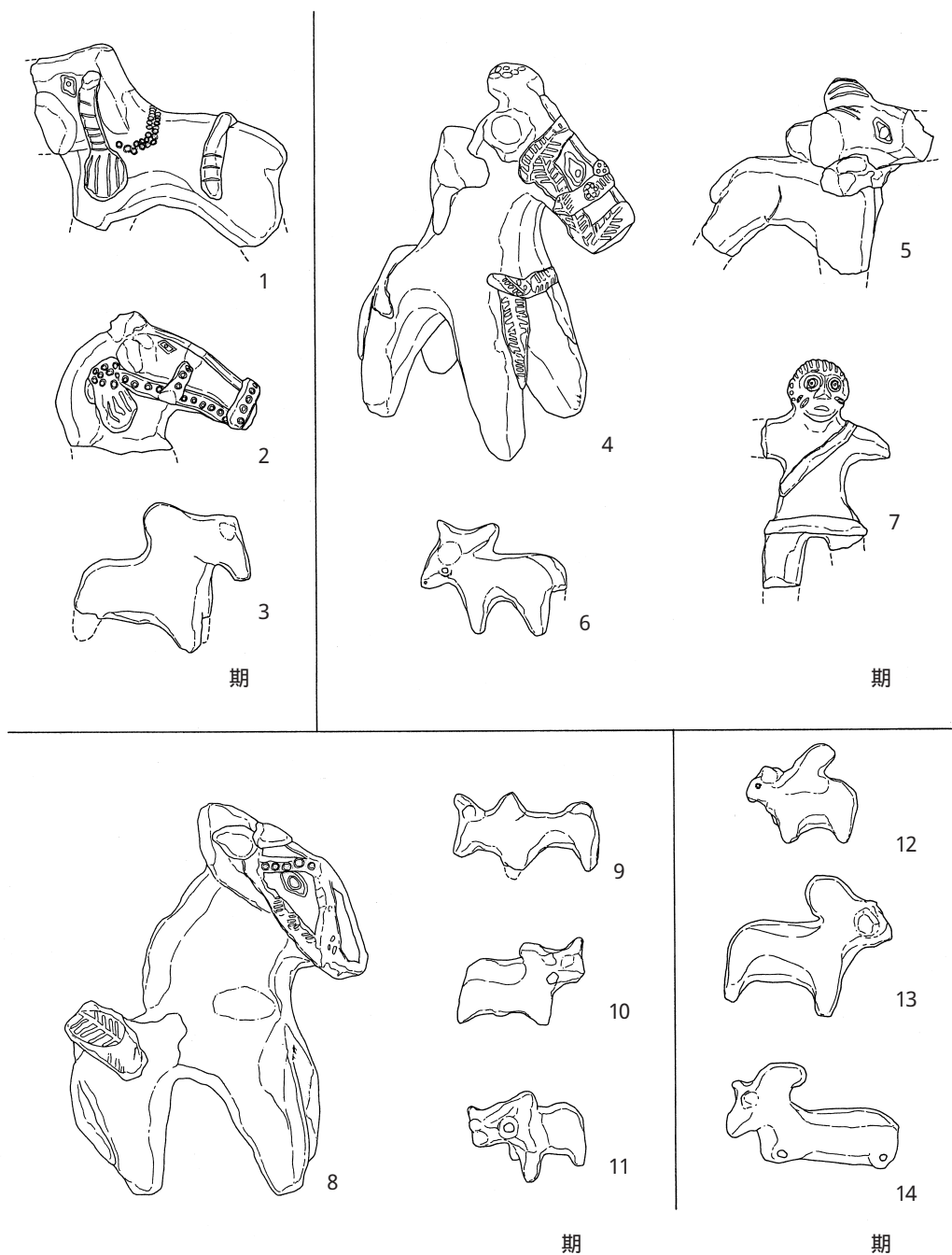
遺跡編年 期（北インド 期末あるいは北インド 期初頭）には菱形眼を特徴とするゾウ形・ウマ形（8）が依然として出土しているが、成形や細部表現における粗雑化が著しい。また、無文のコブウシ形（9～11）や鳥形の出土もみられる。両面型成形によるウマ形の出土もみられる。

遺跡編年 期（北インド 期）には定型化しないゾウ形、無文に近いコブウシ形（12～14）・ヒツジ形、沈線文を特徴とする鳥形などが出土している。無文に近いコブウシ形は四肢を具えるものと、脚部の付け根に穿孔を施し、棒を通して車輪を固定するようにしたもの2種類が認められる。沈線文を特徴とする鳥形は脚台が付くもので、マヘート遺跡 期に出土している鳥形と同一形式に属するものである。なお、この 期においても、菱形眼を表現する動物土偶が報告されているが、菱形眼を除くと形態属性上 期までの菱形眼形式とは大きく異なっており、眼の表現技法のみが残存したものと理解できる。

遺跡編年 期（北インド 期）には、両面あるいは片面型成形によるもの、眼を刺突を施した円形粘土板貼付、鬚をヘラ描沈線によって表現するウマ形、円形粘土板貼付による眼の表現および刺突を特徴とするコブウシ形、無文のコブウシ形などが出土している。両面型成形の一群には、サヘート遺跡 期で出土しているウシ形もみられる。

遺跡編年 期（北インド 期）には、定型化しない個体が多くコブウシ形やウマ形、鳥形などが出土している。

ソーンク遺跡出土資料を概観して注目されるのは、まず第一に遺跡編年 期に出現する菱形眼形式の変遷が追える点にある。すなわち、灰色系から茶褐色系への色調の変化、さらには成形・細部表現の粗雑化という2点が明らかである。ソーンク遺跡はこの菱形眼形式が成立したと考えられるマトゥラーの近郊にあることを勘案すると、マトゥラーからの強い影響のもとに灰色系の菱形眼形式が導入されたが、時間の経過とともに北インドの他の遺跡でみられるような茶褐色あ



第4図 ソーンク遺跡出土 動物土偶 (ca. 1 : 3)

るいは赤橙色系へと転じ、最終的には成形・細部表現の粗雑化を経て、消滅へというプロセスを認めることができるであろう。

第2に注目されるのは、北インドの他の地域との強い共通性を示す菱形眼形式に並んで、無文に近いコブウシ形が存在し、ほぼすべての時期にわたって大きな形態変化を示さずに存続したという点である。こうした無文に近い形式は北インドの他の遺跡では北インド 期の無文形式を除いて広範に分布するものではなく、ソーンク遺跡の動物土偶における独自性とみなすことができよう^x。すなわち、広域分布を示す形式とともに在地型の形式が伝統として強く存在したことを示唆しているといえる。この点は、形式と分布の双方における動物土偶展開の複雑性を物語るものとして注目される。

ハスティナーブラ遺跡

ハスティナーブラ遺跡では、1950～52年にかけて発掘調査が行われており、北インド 期に併行する遺跡編年 期にコブウシ形・ウマ形、 期に菱形眼形式のゾウ形・ウマ形、 期にコブウシ形を中心とする資料、 期からはウマ形を中心とする資料の出土がみられる〔Lal 1954^{vi}〕。

遺跡編年 期（北インド ・ 期）からは、3点（コブウシ形2点、ウマ形1点）が出土・報告されているが、1点が 期上層、ほか2点が 期と 期の堆積層の間にみられる洪水による侵食の後に堆積した攪乱土からの出土とされている。いずれも手成形によるもので、細部表現を持たない。

遺跡編年 期（北インド 期）から出土したものは、菱形眼・スタンプ文を特徴とするゾウ形を中心としている。報告によれば、 期下層から上層にいたるまで出土しているという。細部表現技法の詳細についてみると、木葉形・車輪形から構成されるスタンプ文、円管文、粘土紐貼付などの技法が用いられている。遺跡編年 期から出土しているウマ形1点も同様の細部表現技法を用いており、 期層からの混入である可能性もある。

遺跡編年 期からはコブウシ形を中心とする資料が出土しているが、形態や細部表現といった点で定型化した形式の存在は認められず、個体間の差異が著しい。

遺跡編年 期^{xii}とされるものは、ウマ形を中心としているが、ヒツジ形・コブウシ形もみられる。先述のとおり、ウマ形のうち1点は菱形眼・貼付による細部表現を特徴とするもので、遺跡編年 期からの混入である可能性も否定できない。コブウシ形の1点はサハート・マハート遺跡にみられる無文形式であり、形態の点からみても同一の形式に属するものである。ヒツジ形は、マハート遺跡 期出土形式に共通するもので、刺突を施した円形粘土板を貼りつけて眼の表現とし、刺突を施した粘土紐によって首輪の表現としている。

ガンジス川中流域

カウシャーンビー遺跡（第5図1～5）

カウシャーンビー遺跡では、1949～50年に発掘調査が行われており〔Sharma 1960・69〕、NBPW状のスリップを表面に塗布したゾウ形、菱形眼形式の一群、胸部の沈線文のみを細部表現とする一群、無文の一群などが出土している。

カウシャーンビー遺跡出土資料のうちで最も注目されるのは、NBPW状のスリップを施したゾウ形である(1)。1点が報告されているのみである。実見した資料ではないため、報告書に掲載された写真図版からの判断となるが、菱形眼形式とは異なる形態を有している。出土層位は遺跡

編年 期に帰属するPS . 期^{xiii}で、北インド 期に併行する。

菱形眼形式に属する資料としては、2点が報告されており、いずれもゾウ形である(5)。菱形眼・粘土貼付・スタンプ文・沈線による細部表現を特徴としている。残念ながら色調については報告されていない。また、車輪を固定するための棒を通す穿孔を脚部側面に施したヒツジ形も出土している。菱形眼形式は遺跡編年 期内のSP . B期の出土で、ヒツジ形は遺跡編年 期(北インド 期併行)の層位からの出土である。

沈線文による細部装飾がみられる一群(2~4)は、後述するパータリプトラ遺跡出土資料と同じ特徴を持つもので、胴部背中および四肢側面に沈線が施されている。また、沈線文に加えて円管文を施したものもあるが、この個体についてもパータリプトラ遺跡出土資料に共通してみられる特徴である。これらは北インド 期に併行する遺跡編年 期SP . A期の出土である。

無文形式には、コブウシ形・ゾウ形がある。形態からみると、サハート遺跡 期・マハート遺跡 期に出土しているものに共通している。出土層位は北インド 期に併行する遺跡編年 期とされている。

この他、個体間の差異が著しい定型化しない個体が各時期から出土している。また、鳥形も各時期から出土しているが、定型化する様相は認められない。

シュリンガヴェーラブラ遺跡

シュリンガヴェーラブラ遺跡では、1977~86年にかけて発掘調査が行われており〔Lal 1993〕、前1世紀後半から後1世紀末までに指定される煉瓦積沐浴場遺構と後2世紀に指定される粘土造沐浴場遺構が検出されている。動物土偶はそれぞれの沐浴場遺構の埋土から出土している。

煉瓦積沐浴場遺構から出土した動物土偶には、菱形眼およびスタンプ文を特徴とするゾウ形・ウマ形・ヒツジ形、沈線によって細部を表現する大形のゾウ形(頭部遺存長16.1cm)他に例をみないシカ形などが出土している。菱形眼形式のうち、ゾウ形のみが粘土貼付・スタンプ文による細部表現があり、ウマ形は面繋のみ、ヒツジ形は角のみの細部表現となっている。また、いずれも全長10cm以下の小形で、成形も粗雑である。

粘土造沐浴場遺構からは、円管文および沈線文による細部表現を有するウシ形が出土しているが、いずれも他の遺跡で例をみないものである。

沐浴場遺構の攪乱埋土からの出土であり、層位から本来の時期を確定することは難しいが、型式学的には粗雑化した菱形眼形式が前1世紀にさかのぼる煉瓦積沐浴場遺構の埋土から出土していることは、菱形眼形式の衰退期を考える上で興味深い。

ブラフラードプル遺跡

ブラフラードプル遺跡では、1963年に発掘調査が行われている〔Narain & Roy 1968〕。遺跡編年 B期(北インド 期)に動物土偶の出土がみられる。

ウマ形・ゾウ形が出土しているが、いずれも黒色スリップが施されており、NBPW状の光沢を持つ。ウマ形には首の部分に沈線を施した粘土紐を貼りつけている。ゾウ形は欠損しているが、本来牙を有していたようである。

ガンジス川中下流域

ヴァイシャーリー遺跡

ヴァイシャーリー遺跡では、1950年、1958~62年にかけて発掘調査が行われている〔Krishna

Deva & Mishra 1960; Singh & Roy 1969〕。

1950年に行われた調査での出土資料からみていくと、遺跡編年 b期（北インド 期前半）には、胴部を沈線文によって装飾した形式（後述するパータリプトラ形式）が出土している。報告されている2点のうち1点は赤色系、1点は灰色系を呈する。また、菱形眼・粘土紐貼付による面繫の表現を特徴とするウマ形の出土もみられる。このウマ形は赤色系の色調を呈する。

遺跡編年 期（北インド 期後半～北インド 期前半）には菱形眼・スタンプ文を特徴とするゾウ形・ヒツジ形が出土している。いずれも赤色系を呈する。

遺跡編年 期（北インド 期併行）にも動物土偶が報告されているが、定型化したものは認められない。

1958～62年の調査で出土した資料についてみると、遺跡編年 期（北インド ・ 期前半）からは、沈線文と円管文を施す形式および菱形眼形式が出土している。前者は尖頭状の頭部に大きく突き出した耳を持つが、胴部の沈線文・円管文を除いて細部表現は認められない。ただし、頭部側面に穿孔を施した個体が含まれる。後者にはゾウ形・ウマ形・ヒツジ形が含まれ、スタンプ文を施した個体が存在する。また、菱形眼を特徴とする一群には、四肢の先端に穿孔し、車輪を固定する棒を通す構造にしたものがみられる。他にカメ形も出土している。いずれの形式も赤色系を呈している。

遺跡編年 期（北インド 期後半～北インド 期前半）からは、菱形眼・スタンプ文・円管文を特徴とするヒツジ形・ウマ形、その他定型化しないウマ形・不明動物がみられる。菱形眼形式はいずれも赤色系を呈している。

遺跡編年 期（北インド 期後半～北インド 期）には、菱形眼を特徴とする形式がみられなくなり、定型化しない個体が主体となっている。

パータリプトラ遺跡

パータリプトラ遺跡では、1953・55年に発掘調査が行われており〔Altekar & Mishra 1959; Singh & Narain 1970〕、遺跡編年 ～ 期^{xiv}から動物土偶が出土している。

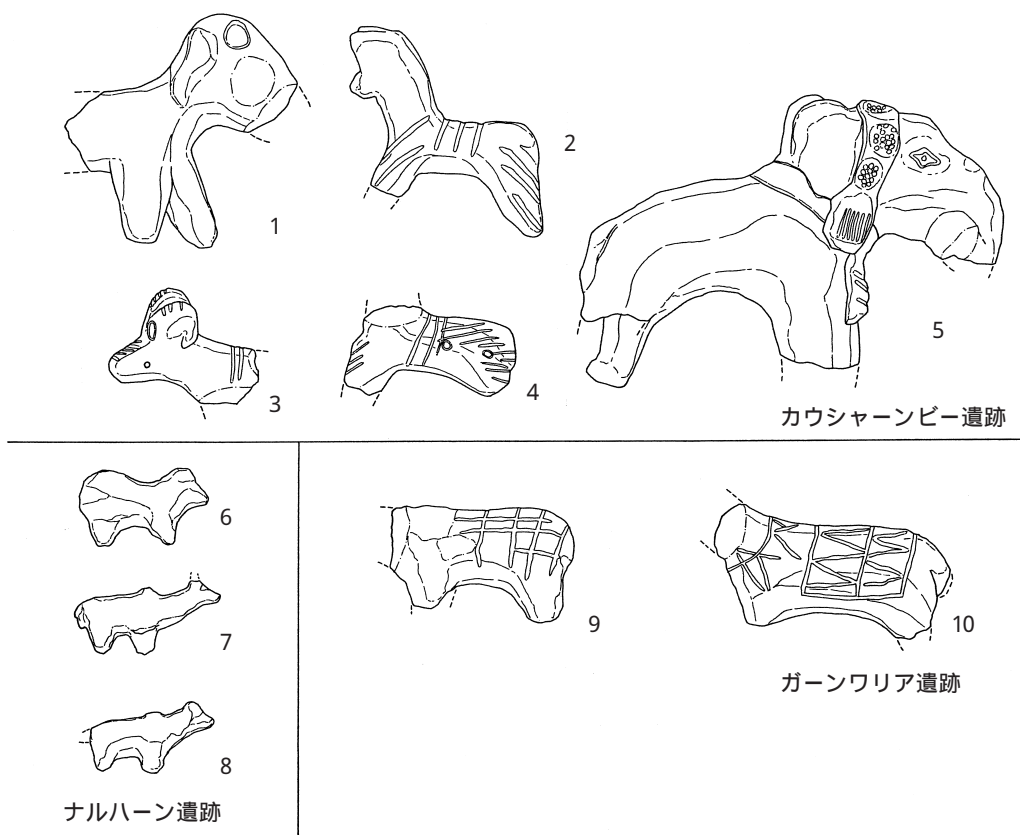
遺跡編年 期（北インド ・ 期）^{xv}には、ウマ形が中心で、鬣を沈線、眼を円管文によって表現する。また、胴部に円管文を施したものもみられる。また、カメ形にも同様の円管文および沈線による細部表現がなされている。他には、菱形眼を持つヒツジ形の出土もみられる。

遺跡編年 期には、ゾウ形・コブウシ形・鳥形がみられるが、定型化した形式は存在していない。

パータリプトラ遺跡で出土している円管文・沈線文を施した一群はその施文技法および施文形態においてナーガ形土偶と呼ばれる土偶形式に共通している。ナーガ形土偶は北インド 期を中心に北インド東半部に展開した土偶形式であるが、円管文と沈線文による施文を特徴としている。ナーガ形土偶の起源地はパータリプトラが位置するガンジス川中下流域にあると推定されることから、この円管文・沈線文を施した動物土偶形式もまたパータリプトラ周辺の地域に起源を求めることが可能である。この点から、ここではこの形式をパータリプトラ系動物土偶形式として呼称することにしたい。

ナルハーン遺跡（第5図6～8）

ナルハーン遺跡では、1984～89年にかけて発掘調査が行われており〔Singh 1994〕、遺跡編年



第5図 カウシャーンビー遺跡・ナルハーン遺跡・ガーンワリア遺跡出土 動物土偶（ガーンワリアのものは縮尺不明、他はca. 1：3）

～ 期に動物土偶が出土している。

遺跡編年 期（北インド 期）から出土しているのは、いずれも全長5 cm前後の小形のもので、背に小さなコブを持つコブウシである（6～8）。

遺跡編年 期（北インド 期）から出土しているものは2点が報告されており、1点は細片で全形が判然としないが、もう1点は細部表現を持たない無文のコブウシ形である。

遺跡編年 期（北インド ・ 期）からは、小形のコブウシ形・イヌ形、側面に車輪固定用の棒を通すための穿孔を施した鳥形が出土している。

遺跡編年 期（北インド 期）からは、無文のコブウシ形・ゾウ形、両面型成形によるウシ形が出土している。両者ともにサハート・マハート遺跡で出土しているものと同一形式に属する。

ヒマラヤ山脈南麓

ガーンワリア遺跡（第5図9・10）

ガーンワリア遺跡では、1972～76年にかけて発掘調査が行われており〔Srivastava 1994〕、遺跡編年 ～ 期に動物土偶が出土している^{xvi}。

遺跡編年 期からは、沈線文・刺突文を特徴とする一群（9・10）NBPW状のスリップを塗布するゾウ形・鳥形、無文のコブウシ、菱形眼・スタンプ文を特徴とするコブウシ形・ウマ形が

出土している。

遺跡編年 期からは、 期にみられた沈線文・刺突文を特徴とする一群、無文のコブウシ形・ウマ形、菱形眼・スタンプ文を特徴とするゾウ形・ウマ形、翼を広げる鳥形などが出土している。

遺跡編年 期からは、無文のコブウシ形、鳥形・ウマ形などの定型化しない一群が出土している。また、菱形眼のウマ形・ゾウ形の出土もみられるが、成形・細部表現が粗雑化したものが中心となっている。

ところで、ガンワリア遺跡の調査では、報告者のK. M. Srivastavaによって、遺跡編年 期がNBPW前期（北インド 期）、 期がNBPW後期（北インド 期）、 期がクシャーナ朝併行段階（北インド 期）とする編年観が提示されているが、報告書に掲載された土器からみると、遺跡編年 期に北インド 期の土器形式が、 期に北インド 期の土器形式が混在しており、層序の攪乱が部分的にせよ存在する可能性が高い。この点から考えると、遺跡編年 期に出土している菱形眼形式は本来的には遺跡編年 期に帰属する可能性も浮上する。型式学的な観点および他の遺跡での出土資料との比較から判断すると、当遺跡の資料は、層位学的な観点よりも型式学的な観点から捉えるほうが有効であると考えられる。

ガンジス川下流域

チャンドラケートゥガル遺跡

チャンドラケートゥガル遺跡では、1960年代に複数度にわたって発掘調査が行われているが、正式な報告書が刊行されておらず、またIAR中での動物土偶に関する情報が限られている。一方、この遺跡では、古くから考古学的発掘調査によらない盗掘などに伴って、多くの資料が発掘されており〔Bautze 1995〕、出土状況や層位などの情報を欠くものの、この遺跡から出土した資料の一端をみることができる。ここでは、J. Bautzeによって紹介された資料を中心にみておくことにしよう。

Bautzeによって紹介された資料には、ゾウ形・ヒツジ形・クジャク形・ワニ形が含まれる。いずれも胸部下半に横方向の穿孔を施し、車輪を固定するための棒を通す構造になっている。ヒツジ形のうちの1点には菱形眼が表現されている。この菱形眼を持つ個体を含めて、いずれも精緻な首飾や頭飾が表現されているが、いずれも型によって成形されている。ヒツジ形の1点には翼の表現もみられる。

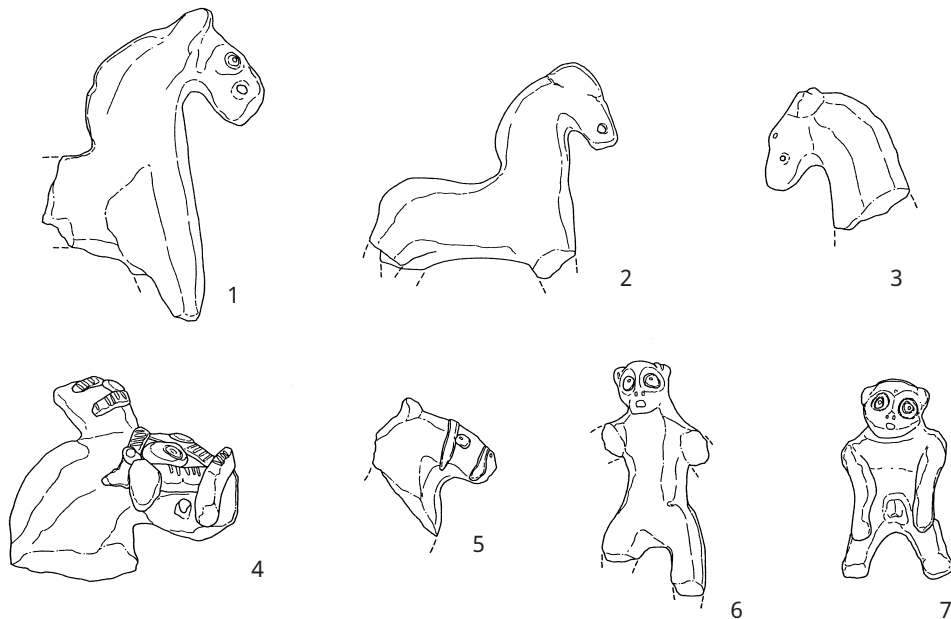
型成形の多用は同遺跡に多く出土している型成形板状人物土偶との強い共通性を示している。また、車輪を取り付ける構造は、北インド 期に位置づけられる他の遺跡での出土例にもみられるものである。この2つの点からみて、これらの動物土偶は北インド 期後半に位置づけることが可能である^{xvii}。

北西インド

タキシラー遺跡

タキシラー遺跡では、ビル・マウンド地区およびシルカップ地区から動物土偶が出土している〔Marshall 1951; Sharif 1969〕。ビル・マウンド地区から出土している動物土偶は大半が北インド

期に併行する遺跡編年 期からの出土であり、北インドの他の遺跡と共通する特徴を持つ資料が多く出土している。一方、シルカップ地区からは、定型化しない個体が多くみられ、かつ北イ



第6図 チャールサダ遺跡出土 動物土偶 (ca. 1 : 3)

ンドの他の遺跡からの出土資料と共通するものは出土していない。

まず、Marshallによる調査資料からみていくと、ビル・マウンド地区 期から出土している資料には、菱形眼を特徴とするゾウ形・ラクダ形が出土しているほか、四肢の先端に穿孔を施し車輪を固定するための棒を通す構造をとるウマ形・コブウシ形が出土している。これらの資料の中にはスタンプ文や円管文を施した個体も含まれている。Marshallの報告によれば、これらの一群は1点が灰色系を呈するほかはいずれも赤色系を呈するという。

Mohammad Sharifの調査では、遺跡編年 期（北インド 期後半）からは菱形眼を有するゾウ形・ウマ形・コブウシ形が出土している。また、四肢の先端に車輪固定用の穿孔を施したものも出土しており、Marshallによる調査成果と一致している。

タキシラ - 遺跡での出土資料からみると、北インド 期に併行する時期に、菱形眼・スタンプ文を特徴する形式が主体となっており、同時期の北インドの他の遺跡との共通性を示しているが、それ以降は動物土偶に対する需要自体が低調となっているようであり、北インドの他の遺跡との共通性もみられなくなっている。

チャールサダ遺跡（第6図）

チャールサダ遺跡では、1958年に発掘調査が行われている〔Wheeler 1962〕。北インド 期の層位からサル形（7）、眼を円管文と刺突によって表現し、頭部側面に穿孔を施すウマ形・コブウシ形（1～3）、粘土紐貼付によって面繋を表現するウマ形（4・5）、眼と角のみを表現したヒツジ形が、北インド 期の層位から粘土紐貼付によって面繋を表現したウマ形が出土している。

この中で、サル形は顔の表現がソーンク遺跡出土例に類似しており、注目される。また、チャールサダ遺跡出土資料の特徴として挙げられるのは、北インドの他の遺跡において北インド 期

に広くみられるゾウ形が欠落していることである。その他の動物土偶では、粘土紐による細部表現や刺突を施した円形粘土板による眼の表現など、技法的には北インドの他の遺跡の動物土偶との共通性を示しているが、時期的な併行関係が明確ではなく、基本的には北インドとは異なる動物土偶の変遷が存在している可能性が高い^{xviii}。

4．動物土偶の変遷と画期

以上の検討から明らかになった諸点について、各土偶様式の時期、分布およびその意義を考察し、北インドにおける動物土偶の変遷についてまとめることにしよう。

北インドでは、北インド 期にすでに動物土偶の萌芽が生起していることが、バグワーンブラ遺跡の資料にうかがうことができる。それは沈線文を特徴とするヒツジ形であるが、同様の例は北インド 期のPGW文化に属するアールムギールプル遺跡やジャーケラー遺跡の資料にもみられることから、PGW文化に特徴的な動物土偶形式と考えることができる。このPGW分布地域では、北インド 期あるいは 期にコブウシ形を中心とする動物土偶が製作されている。

一方、北インド東半部では、北インド 期に位置づけられるナルハーン遺跡において、小形で粗雑なつくりのコブウシ形が出土している。さらに、北インド 期になると同地域では、NBPW状の表面調整を施したゾウ形・ウマ形が複数の遺跡において報告されている^{xix}。

しかしながら、北インド全般において、北インド ~ 期には動物土偶の数量がきわめて限定されているとともに、広範に展開する定型化形式が存在してしない。このことは、この時期における動物土偶に対する需要がさほど高揚しておらず、かつ地域間で共通の形態属性を有する動物土偶に対する需要が共有されていなかったことを示唆している。

こうした状況に変化が現れるのは北インド 期で、マトゥラー地域で出現したゾウ形を中心とする定型化した動物土偶が創出され、それが北インド全域に拡散する。東はベンガル湾口から西は北西インドのタキシラー遺跡にまで及んでいる。定型化と広域拡散という現象は、北インドにおける動物土偶の変遷の上で、大きな画期として評価することができる。ただし、マトゥラー地域に登場した動物土偶とそれ以外の地域にみられるマトゥラー形動物土偶の間には属性の変化が認められる。すなわち、大形品の欠落と細部表現の変化、赤色系への色調の変化などが挙げられる。このことは、マトゥラー以外で出土するものがマトゥラー地域のものよりも後出する可能性を示すだけでなく、拡散の過程で属性の変容が生じたことを示している。

この変容の中には、ヒツジ形土偶の出現や、脚部や胴部に木棒を通して車輪を取り付ける形式の出現も含まれる^{xx}。車形のものとはヒツジ形土偶と結びついて北インド各地の遺跡で出土していることから、マトゥラー地域から北インド各地へと拡散していく過程で創出されたものと理解することができるであろう。

このように、定型化と広域拡散という2つの軸で北インドの統一土偶形式となった菱形眼形式も、北インド 期までには衰退・消滅している。一部の遺跡での出土資料をみると、法量の小形化（シュリンガヴェーラブラ遺跡出土例）、成形・細部表現の粗雑化（ソーンク遺跡例・シュリンガヴェーラブラ遺跡例）を経て、消滅へといったっているようである。続く時期に菱形眼を持つ土偶形式の一部の要素でさえも継承する形式が存在しない点を考慮すると、おおむね同時期に北インド各地で衰退・消滅が進行したと考えることができる。広域拡散の背景であった各地域間の

結びつきが維持される中で、菱形眼形式に対する需要が消失したか、様式変化をもたらす要因が生み出され、菱形眼形式の衰退・消滅を促したということになる。

また、同時期にはパータリプトラ系形式も登場しており、マトゥラー系ほどではないが、地域的な広がりを持っている^{xxi・xxii}。すなわち、この時期には広域分布に展開する形式が出現しており、その出現の背景にはマトゥラーやパータリプトラといった中心地が主導的な立場にあった可能性が高い。

北インド 期になると、広範な地域に共通する動物土偶形式はみられなくなる。というよりも、動物土偶の製作自体が低調となっている。北インド共通の人物土偶が多く製作されているのとは対照的である。動物土偶に対する需要そのものが限定されたものであり、かつその需要は北インド各地で共有されるものではなかったと考えることができよう。

北インド 期になっても、広範な地域に共通する形式は存在しないが、局地的には共通する形式が出現する。サハート遺跡で出土している無文形式はそうした局地的に展開した形式といえるであろう。サハート遺跡のように遺跡によっては、多量に製作・消費されている場合もあり、ある程度動物土偶に対する需要が高揚した状況を窺うことができよう。しかし、一方では北インド全域に及んで動物土偶の出土数が増大しているわけではなく、動物土偶に対する需要の高揚を北インド全体に生じた現象ととらえることは難しい。

北インド 期における動物土偶の状況も、北インド 期に同様である。すなわち、北インド全体での動物土偶に対する需要はみられず、局地的な需要にとどまっている。したがって、土偶の形式変遷も局地的な展開をみせている。動物土偶に対する高い需要が存在したマヘート遺跡では、加飾性の高い形式が生起しているが、北インド 期の土偶形式とは大きく異なっている。

以上の検討を踏まえると、北インドにおける動物土偶の変遷は5段階に分けることができる。すなわち、北インド 期までの動物土偶に対する需要がきわめて限定されており、需要そのものおよび形式の特徴において地域性が明らかな段階（第1段階）、北インド 期におけるマトゥラー系動物土偶の成立とそれに遅れて北インド各地に同形式の拡散がみられる段階（第2段階）、マトゥラー系動物土偶が衰退し動物土偶に対する需要が低調となる段階（第3段階＝北インド 期）、局地的に動物土偶に対する需要が高揚する段階で、無文形式を特徴とする段階（第4段階＝北インド 期）、第4段階同様に局地的な展開を示し、地域的には加飾性の高い形式が出現する段階（第5段階＝北インド 期）ということになる。

以上の変遷過程を念頭に置いた上で、動物土偶にみられるいくつかの要素についてまとめておこう。まず、装飾技法の問題であるが、全般的に動物土偶の場合、細部表現は限定的である傾向が看取できる。すなわち、第1・3・4段階にみられる土偶は、手足や耳・コブなどの動物を形象化する上で最低限の細部を成形しているにとどまる。第2段階においても、パータリプトラ系形式は円管文や沈線文などの比較的単純な装飾技法しか用いていない。

その中で、第2段階のマトゥラー系形式や第5段階のサハート・マヘート遺跡で出土している加飾性の高い形式などは、造形上際立った存在となっている。マトゥラー系形式は人物土偶との関連性で、その細部表現技法を展開させているが、広域に展開していく過程で、細部表現技法が北インド各地に受容されていく背景は、この形式に付与された意味が細部表現抜きではありえなかったことを示唆しているといえよう。第5段階のサハート・マヘート遺跡出土形式の出現の契

機は判然としないが、無文の形式とは異なった存立原理が存在していると考えられる。

次に、形態の問題であるが、四肢の構造に絞って述べておくと、車輪を固定する棒を通す構造を持つものとそうでないものに分けられる。車輪を取り付ける構造は、すでに北インド 期の PGW 文化に伴うヒツジ形においてみられ、以降各時期にその存在を追うことができる。第 2 段階のマトゥラー系形式では、当初は車輪を持たない構造であったのが、その後半期になって再び車輪を取り付ける構造を採用している。

四肢の構造は使用の場における土偶のあり方と関連している。すなわち、車輪を持たないものに関しては、静止した状態での自立あるいは平面上に置かずに保持する方法が考えられる。実際、車輪を持たないものの中には、頭部と胴部のバランスがとれておらず、自立が不可能あるいは不安定になるものが含まれている。こうしたものについては、使用の場での臥置あるいは手による保持が想定される。マトゥラー系形式にみられる大形品は十分に自立が可能であり、自立させて置いた状態での使用の可能性が高い。

一方、車輪を取り付けるものに関してはどうかであろうか。従来、車輪を持つ土偶に関しては、玩具として説明される場合が多い。そうした使用法も否定できないが、つくりの精巧なものに関しては、単なる玩具としてよりも儀礼行為等の場での使用も想定すべきであろう。車輪を取り付けることによって実際に動かすことを意図したのか、あるいは象徴的な意味としての車輪の存在であるのか、俄かに断定はできないが、車輪自体に精神的な象徴性が見出される南アジアの宗教世界においては、後者の考え方もあり得べきことであろう。

最後に法量の問題であるが、マトゥラー系形式の大形品を除くと、いずれの時期においても 10 ~ 20cm 前後のものと 10cm 以下の小形品が存在している。法量についても、使用方法との関連性が高いと考えられるが、使用の場で廃棄もしくは遺棄されたと考えられる資料が得られておらず、明確にはし得ない。ただし、成形との関連性からみると、大形品ほどつくりが丁寧で、小形品になると粗雑かあるいは細部表現が限定的なものになっている。

以上 3 点の要素を挙げて略述したが、いずれの要素も土偶に付与される意味、さらには製作から使用、廃棄にいたるプロセスとの関連性の中において理解される必要がある。それはすなわち、動物土偶を取り巻く社会・文化の総体との関連性にほかならず、動物土偶が文化・社会の中でどのような位置づけを与えられていたのかという問題の解明に帰結されるものである。

それぞれの段階において、動物土偶に対する需要のあり方および共通形式の存否が認められる。そこには動物土偶の社会における位置づけが投影されていることはいうまでもなく、そうした社会内部の志向性が動物土偶の変遷を規定しているといえるであろう。

最後に、人物土偶〔上杉 1997a・b〕との関連性について付言しておく、おおむね人物土偶の形式変化と動物土偶の形式変化の時期は一致している。広域に展開する定型化形式の出現は第 2 段階に位置づけられるが、人物土偶においても定型化した形式の出現は同時期の北インド 期である。ただし、人物土偶が稀薄な北インド ~ 期において、限定的ながらも動物土偶が存在している状況は、両者の出現の契機を考える上で注目されよう。第 2 段階に出現するマトゥラー系動物土偶はマトゥラー系人物土偶との関連性が濃密であり、マトゥラー周辺において人物土偶と動物土偶がセットとして出現した状況をみて取ることができる。ただし、北インド 期における人物土偶はマトゥラーとパータリプトラを中心地として土偶の形式変遷が生起しているのに対

し、動物土偶の場合はマトゥラー系形式が優勢であり、パートリプトラ系形式は人物土偶に比較すると限定的な広がりにとどまっている。このことは、人物・動物を含めた土偶に対する需要が高揚したこの時期において、人物土偶と動物土偶それぞれの地域展開の上で作用する要因あるいは原理が異なっていたことを示しているといえよう。

第3段階には、単一形式の人物土偶が北インドに広範に分布しており、盛んな土偶生産・使用が行われていたことが明らかであるのに対し、動物土偶においては局地的な展開にとどまっており、北インド全域での動物土偶生産・使用の高揚は認められない。第2段階から第3段階へと推移する過程において、動物土偶に対する需要が変化した状況を見ることができる。すなわち、人物土偶と動物土偶の双方に均質な需要があったのではなく、異なる社会の志向性が両者に働いていたということが理解できよう。

第4段階になっても、人物土偶に対する需要は高く維持されているのに対し、動物土偶については低調である。しかし、遺跡によっては動物土偶に対する高い需要が認められ、局地的に展開する形式も登場する。それは無文様式を中心としているが、第4段階が相当する北インド期の人物土偶には、手成形によるナイガメシャ土偶および型成形による板状土偶が出現している。この中で、ナイガメシャ土偶は顔の細部表現を除いて無文であり、成形および形態の上で無文の動物土偶形式に共通している。すなわち、ナイガメシャ土偶と無文の動物土偶形式の間に両者の成立の上で関連性を推測することができよう。

第5段階にも、動物土偶に対する需要は局地的に存在しているが、人物土偶はこの時期（北インド期）には著しく衰退している。人物土偶に対する需要が低下する一方で、動物土偶に対する局地的な需要が高揚し、刺突・貼付を特徴とする動物土偶形式が出現したと考えることができる。したがって、この時期の人物土偶と動物土偶の間にはその消長に関して異なる背景が存在したと考えることができるであろう。

以上のように、人物土偶と動物土偶の間には、成形や形態上の関連性が顕在化する時期と、両者異なる展開を示す時期が存在している。また、分布の上からも共通する部分と異なる部分が並存しており、両者の間には錯綜した関係が存在したことが理解できるであろう。

土偶という共通する表現媒体を採用していながらも、人物土偶と動物土偶では、それぞれに対する需要あるいは志向性の背景は異なっていると考えられる。それは北インド社会内部における土偶に対する需要の複雑性を物語るものであり、かつそれぞれに対する需要の背景となる観念世界のあり方を考える上での問題を提起しているものと評価できる。

5．おわりに

以上、サハート・マハート遺跡の出土資料の検討を基軸として、動物土偶の変遷について検討を加えてきた。ここに示したのは動物土偶の変遷の概略にとどまるものであり、変遷の歴史的・社会的背景については今後の課題として置くこととする。

土偶に表現される対象となる動物の種類は、それぞれの時期・地域の社会・文化的志向性によって規定されるものであろう。また、それぞれの形式にみられる属性も社会・文化的な背景によって左右されていることはいうまでもない。人物土偶と動物土偶の関係にも社会的な志向性が投影されているのであろう。

こうした問題を検討していくことは、土偶という一つの媒体に表現される北インド社会のあり方を考察していく上で興味深い課題であるといえよう。人物土偶と動物土偶の差異はいかなるものであったのか。こうした問題の所在を提起しえたら幸いである。

本稿をまとめるにあたっては、網干善教先生をはじめ、多くの方々からご指導・ご協力賜りました。末筆ながら、ここにご芳名を銘記し、深謝申し上げます。

D. K. Ambastha, R. S. Bisht, K. C. Nautiyar, D. K. Singh, N. K. Sinha, S. Srivastava, J. M. Thapar, 大谷宏治, 小磯学, 小西正捷, 近藤英夫, 宗臺秀明, 徳田誠志, 深野信之, 藤原達也, 山口卓也, 米田文孝 (敬称略, アルファベット・五十音順)

註

- i 管見による限り、動物土偶に関する研究としては、Pratibha Prakashによるラージガート遺跡出土資料をもとにした研究〔Prakash 1985〕があるのみである。また、発掘調査報告書においても、動物土偶が報告・記載されていない場合があり、研究の遅滞の一因となっている。ちなみにPrakashの研究は、時期的・地域的に現在得られる資料を、著者が実見した資料もまじえて網羅的にまとめている。型式の設定に疑問を感じる部分もあるが、現在までのところ唯一かつ重要な研究といえる。
- ii サヘート遺跡の場合、遺跡編年 期(北インド 期)までは、当該期の層序からの出土遺物からみて攪乱や混在などはみられないが、遺跡編年 期(北インド 期)以降になると、型式学的に異なる時期に帰属することが明らかな遺物が混在している。これは、遺跡編年 期以降、既存建物からの煉瓦抜き取り・再利用が顕著になったため、土層の攪乱が著しくなったことに起因すると考えられる。したがって、筆者の判断としては、遺跡編年 期までは層位的情報を編年作業の上で活かすことができるが、それ以降は層位的情報に全面的に依拠することは難しく、むしろ型式学的な視点からの位置付け・評価が有効であると考えている。一方、マヘート遺跡に関しては、層序の攪乱が稀薄で、土層の堆積がきわめて安定しており、層位学・型式学の双方からの編年作業が可能である。
- iii この無文形式はサヘート遺跡では遺跡編年 期に集中しており、 期にさかのぼる資料はなかったが、マヘート遺跡では、遺跡編年 期(北インド 期)後半に位置づけられる層位からこの形式に属するコブウシ形が出土しており、その初現は北インド 期後半にさかのぼる可能性が高い。
- iv ローバル考古博物館に保管される出土資料の実見による。ローバル 期以降における動物土偶については、確認したかぎりでは保管されていない。実見にあたっては、インド政府考古局R. S. Bisht博士およびローバル考古博物館学芸員のJ. M. Thapar氏のご高配を賜った。なお、ローバル遺跡の発掘調査に関しては、概報が出版されているものの、正式報告書はなく、出土層位などの詳細な情報については得られない。
- v アトランジーケラー遺跡では北インド 期に併行する遺跡編年 期の文化層が確認されているが、残念ながらこの時期に関しては報告書の中では一切報告されていない。ただし、IAR1962-63に掲載された写真図版には遺跡編年 期(北インド 期後半~北インド 期併行)あるいは 期〔北インド 期併行〕の資料として、サヘート・マヘート遺跡で出土している無文形式のコブウシ形が報告されている。

- vi マトゥラー遺跡では、複数次の調査が行われているため、調査年度によって異なる時期区分が設定されているが、ここでは1970年代の発掘調査を担当したM. C. Joshiがまとめたマトゥラー遺跡の時期区分〔Joshi 1989〕に拠っている。
- vii マトゥラー遺跡では、灰・精製土器片を含む土坑内からのゾウ形の出土が報告されている〔IAR 1974-75〕。調査者のM. C. Joshiによれば、こうした土坑は祭祀関連遺構の可能性を持つという〔Joshi 1989〕。その性格を特定することは困難であるが、動物土偶の使用あるいは廃棄のプロセスに関わる事例として注目されよう。
- viii 例えば、Bautzeによって紹介された資料は、全長31.0cm、全高37.2cm、Palによって紹介された資料は、全長28.6cmを測る。これら2点はいずれも騎者を乗せている。
- ix マトゥラー遺跡では、北インド 期末（前4世紀頃か）に人物土偶が初現し、型式変化を経つつ、前2世紀頃まで「マトゥラー系」と設定し得る人物土偶の変遷がみられる。その中で菱形眼を採用するものは、型式序列の中では第2段階に出現する。筆者は、その成立の絶対年代として前4世紀後半を推定している。菱形眼を特徴とする形式に後出して、顔を型によって成形する形式が成立する。人物土偶の細部表現技法としては、貼付・円管文・スタンプ文が多用される傾向にあり、ここでマトゥラー系動物土偶とした形式との強い共通性を示している。
- x 同様の無文に近いコブウシ形はパンジャブ州に所在するサンゴール遺跡（遺跡編年 期＝北インド 期併行）で出土が報告されている〔IAR 1987-88〕。この遺跡の出土例は、頭部側面の穿孔を除いて細部表現を持っておらず、ソーンク遺跡の例に類似している。
- xi インド政府考古局ブラーナ・キラー遺物保管庫に保管される出土資料の実見による。実見にあたってはインド政府考古局R. S. Bisht博士およびK. C. Nautiyar氏にご高配賜った。
- xii ハスティナーブラ遺跡 期は、発掘調査者のB. B. ラールによると、出土貨幣および土器形式からみて11世紀後半から15世紀前半に位置づけられているが、報告書に掲載された土器形式に関する筆者の判断からすると、5・6世紀の資料が主体となっており、 期の開始年代は遅くともこの時期にある可能性が高い。したがって、北インド ・ 期併行の文化層および資料がこのハスティナーブラ 期に含まれていると考えたい。
- xiii カウシャーンビー遺跡の報告書における時期区分で用いられるPSとはpre-structural、SPとはstructural phaseの略で、煉瓦積建物の有無を指し示している。
- xiv パータリプトラ遺跡の調査では、18世紀以降に推定される 期も設定されているが、ここでは 期の出土資料の検討は省略する。
- xv パータリプトラ遺跡の調査では、遺跡編年 期が前600～前150年ごろとされており、北インド ・ 期に併行するが、円管文はパータリプトラを中心として分布したナーガ形土偶に共通する細部表現技法で、その地域的な同一性と技法の共通性からみると、円管文を施すウマ形はナーガ形土偶と併行する時期に推定することができる。したがって、遺跡編年 期でも後半期、すなわち北インド 期に帰属する可能性が高い。
- xvi ガーンワリア遺跡とインド・ネパール国境を隔てたネパール領内にあるティラウラー・コート遺跡（遺跡編年 期＝北インド 期併行）においても菱形眼・スタンプ文を特徴とする動物土偶が出土している〔IAR 1961-62〕。
- xvii 型成形の多用と車輪を固定する構造から判断した筆者の編年観は、Bautzeによって推定される年

代観と一致している。

- xviii 本来的に北西インドでは、土偶に対する志向性が北インドに比較して稀薄である可能性が高い。人物土偶についてみると、前2～1世紀頃に北西インド在地色の強い手成形・粘土貼付・沈線文を特徴とする形式と、ギリシャ系の造形要素が色濃い型成形土偶が存在するが、それ以外の時期では定型化した人物土偶形式は存在しない。このことから考えると、北西インドでは社会・文化における土偶に対する志向性が、北インドとは異なっていた可能性が高い。おそらく動物土偶においても同様で、北インドとは異なる在地的背景が動物土偶のあり方に関与していると考えられる。
- xix 本稿で取り上げたカウシャーンビー遺跡、プラフラードプル遺跡、ガーンワリア遺跡のほかに、マトゥラー遺跡、ピータ遺跡、ブクサル遺跡、アヒッチャトラ遺跡で出土している〔Prakash 1985〕。
- xx 本稿で取り上げた遺跡のほかに、ガンジス川中下流域に所在するチャンパー遺跡でも車輪を取り付ける構造を持つヒツジ形が出土している。
- xxi この円管文や沈線文を特徴とするパータリプトラ系形式は本稿で挙げたマヘート遺跡やパータリプトラ遺跡、カウシャーンビー遺跡、ヴァイシャーリー遺跡、ソーンブル遺跡の例のほかに、ガンジス川中下流域のチャンパー遺跡（遺跡編年 A期＝北インド 期併行）でも出土している〔IAR 1971-72〕。この遺跡で出土しているのは球形の胴体を持つ鳥形で、斜めの沈線文を施したのちにその間を短沈線で充填するというナーガ形土偶に共通する施文形態が採用されている。また、眼は丸く隆起し、その中央に円管文を施すという技法を用いており、この技法にもナーガ形土偶との共通性を示している。ナーガ形土偶とより近い特徴を持つ資料と評価できる。また、同じくガンジス川中下流域に位置するチランド遺跡でも、パータリプトラ系形式に類似する沈線文のみによって施文を行う動物土偶の出土が報告されているが〔IAR 1970-71〕 出土時期の報告がない。
- xxii マトゥラー系とパータリプトラ系という2つの形式の分布を考える上で興味深い資料が、ビハール州中央部に所在するカトラール遺跡〔IAR 1976-77〕とバリラジガル遺跡〔IAR 1972-73〕の出土資料である。いずれも北インド 期に併行する時期の出土資料で、ウマ形・コブウシ形・ゾウ形が含まれる。これらはマトゥラー系に特徴的な菱形眼を持つ一方で、胴部にはパータリプトラ系に由来すると考えられる同心円状円管文や沈線文を施している。また、列状刺突文というほかに例をみない施文技法もみられる。即断はできないが、これらの資料はビハール州という地域において、西からのマトゥラー系形式の要素と近接するパータリプトラ系の要素が混在して製作された個体である可能性を持っている。北インド東半部の遺跡では、同時期もしくは近接する時期からマトゥラー系とパータリプトラ系が出土しているが、互いにまったく関係を持っていなかったのではなく、それぞれの形式の属性は維持しながらも、製作者・使用者のレベルでは何らかの相互交渉が存在したのであろう。両者の要素を並存させる個体の存在は、そうした両形式間の相互交渉の結果である可能性がある。

本文中に用いたアルファベット略号は以下のとおりである。PGW = 彩文灰色土器 (Painted Grey Ware) BRW = 黒縁赤色土器 (Black-and-Red Ware) BSW = 黒色スリップがけ土器 (Black Slipped Ware) NBPW = 北方黒色磨研土器 (Northern Black Polished Ware)。

引用・参考文献

- 網干善教・園田香融編1997『祇園精舎 サヘート遺跡発掘調査報告書』関西大学
- 網干善教・高橋隆博編2000『マヘート遺跡発掘調査概報 1991～1999年度』関西大学文学部考古学研究室
- 上杉彰紀1994「前1千年紀の北インドにおける土器の変遷」『インド考古研究』第16号
- 上杉彰紀1997a「人物土偶のまとめ」『祇園精舎』（網干善教・園田香融編），関西大学
- 上杉彰紀1997b「北インド・初期歴史時代における土偶の変遷」『インド考古研究』第18号
- Altekar, A.S. & V. Mishra, 1959, *Report on Kumrahar Excavations 1951-55*. K. P. Jayaswal Research Institute, Patna
- Hartel, H., 1993, *Excavations at Sonkh*. Dietrich Reimer Verlag, Berlin.
- Gaur, R.C., 1983, *Excavations at Atranjikhhera*. Motilal Banarsidass, Delhi.
- Joshi, M.C., 1989, Mathura as an Ancient Settlement. in *Mathura - The Cultural Heritage* (D.M. Srinivasan ed.), American Institute of Indian Studies, New Delhi.
- Krishna Deva & V. Mishra, 1961, *Vaisali Excavations 1950*. Vaisali Sangh, Vaisali.
- Lal, B.B., 1954, Excavations at Hastinapura and Other Explorations in the Upper Ganga and Sutlej Basins 1950-52. *Ancient India*, Nos. 10-11.
- Lal, B.B., 1993, *Excavations at Sringaverapura (1977-86)* vol. 1. Memoirs of the Archaeological Survey of India, No. 88, Archaeological Survey of India, New Delhi.
- Marshall, J.H., 1951, *Taxila - An Illustrated Account of Archaeological Excavations Carried out at Taxila under the Orders of the Government of India between the years 1913 and 1934*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Narain, A.K. & T.N. Roy, 1968, *The Excavations at Prahladpur*. Banaras Hindu University, Varanasi.
- Narain, A.K. & P.K. Agrawala, 1978, *Excavations at Rajghat* Parts IV/V. Banaras Hindu University, Varanasi.
- Pal, Pratapaditya, 1986, *Indian Sculpture* Volume 1. Los Angeles County Museum of Art, California.
- Prakash, Pratibha, 1985, *Terracotta Animal Figurines in the Ganga-Yamuna Valley*. Agam Kala Prakashan, Delhi.
- Sharif, Mohammad, 1969, Excavation at BhirMound Taxila. *Pakistan Archaeology*, No.6, The Department of Archaeology Pakistan.
- Sharma, Y.D., Past Pattern in Living as Unfolded by Excavations at Rupar. *Lalit Kala*, 1-2.
- Sharma, G.R., *Excavations at Kaushambi 1949-50*. Memoirs of the Archaeological Survey of India, No. 74, Archaeological Survey of India, New Delhi.
- Sinha, B.P. & B.S. Verma, 1977, *Sonpur Excavations (1956 and 1959-1962)*. Directorate of Archaeology and Museums, Patna.
- Sinha, B.P. & L.A. Narain, 1970, *Pataliputra Excavation 1955-56*. The Directorate of Archaeology and Museums, Patna.
- Sinha, B.P. & S.R. Roy, 1969, *Vaisali Excavations 1958-1962*. Directorate of Archaeology and Museums, Patna.

Sinha, K.K., 1967, *Excavations at Sravasti - 1959*. Banaras Hindu University, Varanasi.

Singh, Purshottam, 1994, *Excavations at Narhan (1984-89)*. Banaras Hindu University, Varanasi.

Srivastava, K.M., 1996, *Excavations at Piprahwa and Ganwaria*. Memoirs of the Archaeological Survey of India, No. 94, Archaeological Survey of India, New Delhi.

Wheeler, R.E.M., 1962, *Charsada - A Metropolis of the North-West Frontier*. Oxford University Press, Oxford.

文献註中におけるIARは*Indian Archaeology - A Review* (Archaeological Survey of India, New Delhi) の略号。

挿図の出典は以下のとおり。

第1図 筆者作成

第2図 〔網干・園田編1997〕および〔網干・高橋編2000〕より筆者作成。

第3図 〔Joshi 1993〕に掲載された写真図版よりトレース作成。

第4図 〔Hartel 1993〕に掲載された写真図版よりトレース作成。

第5図 〔Sharma 1960〕〔Singh 1994〕〔Srivastava 1996〕に掲載された写真図版よりトレース作成。

第6図 〔Wheeler 1962〕に掲載された写真図版よりトレース作成。